



中村俊定文庫
文庫 18
147



平木から
↓
乾坤

あ乃鹿此尻事々形外旅の爰志指
西に渡りて一りやの芭蕉八甲戊
此風く破事さるさ徳此翁の老し風
今世才且吹あふ事隄と旋こりて
そし流るるや今更よらなる記りて
らと志の何事かとも翁の海かこりて
ゆきくも東西の枝葉んく

つりほとつきくをさくたたくも
なごいしふと獨素門鳥落人のむよ
變し日月代しそふ起る風り
和くはく其私よ霞を身へ自然
の乃よ至終しそ思ふは彼句非專
銀鍊妙只在空圓の和と拵む銀鍊
あるのあり和し和せりう取よる
銀鍊しそ志くを翁者しにふさかし只

妙しそや只言ふ何くと更りおれ求る
しつとそ系色まつふれ枝を宿業代
拵る果拵ゆるにふんかすや素素
於樹のとを身へに樹の人の肺肝を
探さむぬとそ興あふんとそみ
しそ出るよそ人欲る名利の場よあてそ
情さむ残しそ自詠皆計較しつり
且偽の情しそ人事成あけらあは

しなまひうきく狎師一徳の宗に
をなまひうきくみきなまひうきく彼日ふ當れ
毎く洛の誓願寺なる見松院り
僧くそ銀衣を歎くまの如
二時元祿己卯初冬中一日

洪舟斎



本かくくり下てしすと本よむ

唯然



こゆきく一日よむいふ表されがく 泥足
引馬と毛鶴つる人かん撫せく 風國
くがたあまあ乃ちくく 柳水
あやうれ月夜を只き指くまむ 淡齋
まきくこくく 薄若のたれ 太素
場より羽とのも雁かゝ一文字 荷鳥
終合成るや物なまひくく 然

西陣乃臨のともやうも唐風よ
ほきかひをうもいとまふふ
まじくも枕まのまきもなごめ
蔭戸のみれつと鶯の音
時あてもん流よきの阿乃松
い川まかしくも茶お月い新
是非にない皴よ病よ松白髪
おろろ月あうり足袋さるて指
齋 齋 齋 齋 齋 齋 齋 齋

むさくもやを私乳を旅おまはつて
あまうけきと是もくいまより
さひらけの室を法師のよふお
えりか見やき蛇つり乃
大分なあと代妹う舞とりて
くづるも度や尻を厚つり
膝掃く屋火燵うもて退
歩月あふみ米乃分
齋 齋 齋 齋 齋 齋 齋 齋

甲上

階もぬき竹も梢もさげふふ
 茶湯こころにそこのけり
 後へ見事な誰にや後かけ
 高なるも場をくらふぞ
 是一月先日はあめあれど
 志をいしくよむも秋田の毒
 啼鹿乃中ふも阿まいしく
 よ回とよあけもそもの旅

齋 國 鳥 系 然 有 足 所

今もかつともそとをうらまひ
 海乃小うそれも冬一後
 此村の同じやうぬるり記ころも
 今このころもそとをうらまひ

葉 鳥 水 素

綿のきり
居候うま比

惟然

何事も聊尔み秋の臨乃宿
毛よんらくや月乃物くく荷多
女御花萩萩花かあるこに淡齋
あんうくやうい世中てあろ巴流
あうり足おまきくあうくと少風
尺く来さやうにここれ歌を太素

下畧

松なうと不断ふきとも時秋 淡齋

文よきこ也

暮や風ハ廣くへあひく出れ 仙臺 千調
セウれを疾くやうに月の入 伊賀 土芳
秋風ハあくうぬる是あくハ 列六
小きされゆあべを ちく とよや男麻 玄梅

田家の夕暮成

なまよとて葉はう風あくより ヒメチ 千山

しつぽうしつぽう
ふよとひねり

猫の子とてさうなうらな物さうしつぽう
元催灌

朔日けこまうくとよらわひ出る
猫の子誠め哀憐せられしは
の字に力ありてせぬおきりあ
さきく免られん年と老らう
られ秋ハ狂をの衣よりおひせ
履ききる感懐ことふいそん
ふあれ 故箱を折るさひ
さうとて直母さされる 香山人

巳卯
月乃感の記

きつと月れあしき事しあふなる
さうとて流しぬきまうらうら
はる人しきさるるあんとまをち
おきとるるふ右極子らまをら
そめ小獨り声念具の衣をのし
かろあうまをりそまをらし
うこふいお年あつさくさ物所
いささ茶を先とうしりりしはま
今や月しといふあしに古物の
一袖を念しきそり成あつた物流
のまおとくしつ御の月よあ
流るる深し思ひわきてあつ
とあつやうさか

茫々然

病力くく けりしとてい ぬ乃月を乞 鳥落人

まこと此ころは夕暮毎に熱火に
おこりしおろけのあはれなり今月
こころよきやうあるべしは是非
よしとすれは月夜のあめ小舟を
おろしけははるし是も又造物の
のものむとわらふやと大笑ひ乃
ちきり門人乃これまもこそり
こそつく相共めさるるまを

ぬれ降 句をなきはれく乃月 行蘭 か年

今のまふ月哉おとて須磨の石 花鳥

月々有句を乞るれと意おぬえ 茶本

ぬの雨くたしきと月の名いる か年 花昼

こころいしむさふん か の月 花鳥

酔くけて基いんまきりこま月丸 別上

うけつひをてはれとみおも
云更なる比風一きり月のを
おとお月つちおれり良のて
や白飯ことおれりいれま
酔くても酔くても共まぬ
てすこなる

洪齋竹

いそを本も洗くく月のとうふくら

月よしきしあはれなりも又いしる 雨級

乳敷しれ々や月と我もろ梅子
若みふ是れとともやう月乃由惟然

その夕アにかりんてさよふら
やをれさうなる

夕陽山^カ川をほるきた月影乃
いさよふさうさうもろか〜

十六夜や格ふよそ月さる月 列古
いさよひのやうさうもれも 汀菊

文母さこめ

名月や中夜にありてそま 玄梅
語を身にちまいてちくを月之白
まらやき今るるの雲は月〜
そ独り〜かうした月れ々も月その
や建蘭乃々やとあへて居るきの 惟然

こゝろなごうしんくさばねよ姫の葉の 大素

十三歌

うきよは是よいひとも月のををう 治齋
何をうかひあても足るい後志月 大素
いさくしは後の月人々意かあう 別出
又といやふれ盈祿も月れめえぞ 訂葉
されものあいけはあうも後の月 石民
何のを此世話あるともものち此月 荷香

やうききしよと思へも相もけりの月 泥足
あんあうと思われも月乃能名残 惟純

雪歌

おさるや所とくのま 四角 雲鈴
おさるやそはてんまそそ夕かす 柳水
おさるやあそぬのまそそ音満す 梅子
おさるやまをかのこ音乃るむ所 兔葉

文のせい

竹こくりまゝいのりなをとる乃る色

洪齋

あそくそそ月乃さあうり 惟然

高き折しんを結うすくやえ 令を

まじしそくもあまふくもあま 大素

惟子も肩おからぬく 乃 浪足

ふゆくくく 声好大勢 栞言

併春梅檀の木とあまの柳水

そくもあまあまうそくあいま 栞子

さくくそく息息とくえまふけ出入 危象

誰うはんそくそくせ。 感々 荷言

今晚ハ何とあまふくあまの酒列六

くくいと見せき月もさうさへ 年

秋くせまうあうくくや 粟田口 せ鈴

く高い高くくや 雲の音あり 波衛

志とけあうまのたまさくその酒 惟然

ほころひなまきえ立あう 徳 全を

夕暮おくともよからぬあまの孫おさふ大素
此承き日のお果ぬ 甚そ 涙足
免さすこゝ今日ハこちうがまぶあまの梅子
あろりうこゝこゝそ色のおつさ 柳の
ら月一お唯此あろり神さひう 梅子
そのさ〜〜たや嫁のか〜こさ 免梨
とろりうとあまのあまのあまの里 昔なる
何そこおんあ〜こちの村そよ 列六

葛籠よりと少後箱の如くまゝお 飯士
さ〜らとを海くこた白雨を於
ふもいそが 代何みかろ〜そ 洪高
柳く〜しやると是いつあ〜い 惟能
まろくにはさ〜ら〜形の月れ新 泥足
そまか〜それへも海れ屋つ〜り 梅子
旅籠屋出〜あ〜そあ〜よいさえ 金糸
〜〜〜い〜い〜い〜い 梅子

け川よふれまがしとそらふくと免ふ
 かこまかこものらこのつく太素
 又こらふ人又つきさう花虫舞撒士
 春乃山隠是よい系荷也

山登りまつて

とぞか乃梅うけあつて尺門洪齋
 又くきこも

幸のめねをひ思あこよう梅を始元灌
 菽神乃都う川若や小和時女伊應三
 松を連の小屋も陰世の志くれ家全更互
 母園み飛鳥うなり村く事全純子
 けきし人の二周全四よ
たのしみ
 されまろあぢみえねれとふふあり 刈實
 月のあたまれも冬の中りも 洪齋

49
上
たのむら世よみんれつちの穴
塞りんと火桶のふふまはの
幸さあめれのそみいこのの
やうくあがりかぬにあねとも
むさすうを初さんもよめと
うづくまを折るやとふあつれ
まきさお徳をかみ膝も漸痛くは
とらむこの多々ねとささよ
やめるともなげきやれこころ
おとしこもいおとらぬはあま
て焚火元より供いなり何
とせり何としてる小物も清
まて只あり合まらんあまとい
あひふ

うらうらんこいそせいよさむくとを

惟然

嵐小ちうう菓を吹出さまうむく
鬼に飛びりりよめを落さうまよま
つとく志しよふふしよれを時
のうらよと大をれ羽を記すや
中よ各利の枝枝を設されし
いと難波のうこちもふ終振
これに夜小十日さるを羽を後
ひて口り世の中を舞まはる
こと其をうめしうこれをも
よとらあつきよれを例の茶粥
よや一柄と啼出でぬ
あつりみされたり

こがしを雀のやうに押合ふ

洪齋

そんぢういんじんまよ 鶴鶴 ちん
さむしんくさくさかたれんところ 柯言
うしひまよちる 残る川をまらちとえ 太素
あさるとるよ ぬじううらふい 惟純

一心教傳都凡目はあつ人 かつ彼書の中
ぬちれ先よむ句の物とさあちあふ
ふあ句付句よまにそことしん 残勝をたれや
そのしん 勢をいんまのほあう味あ
一してせ寄湯行節のちん 物考に海山
ころむ家 拾ふかや中せを 彼ふの系傳
よ阿しんと 難せし人をもさるよ 曲豆後の
兼批、此句やうしん 侍陽乃の考ふ訓

てまゝも思ひ出せる人かして知るまゝく
おまゝの史記かとも思へばはるのよう
云ひしれも思ひ出せる

多分人かと思ひ出せるうち
うらむるも思ひ出せる
かまゝ書とめ侍る

乞評

御教それ侍人乃あまれかを 洪齋

その妻かを阿まき人かを阿ま
国のかちれも思ひ出せる
とあまも具侍人の侍よあま
阿まのうらむるも思ひ出せる

こゝに侍出るあまも思ひ出せる

あまも思ひ出せるそのか
の史記かとも思ひ出せる
まゝも思ひ出せる
まゝかも思ひ出せる

定まらぬありきいれおと種くく記免糸
とらききこり終るも風はあきうか柯言

文り

歌みおれ吾を小者いつめくう歌 善徳 太虚
おれやおりそかぬ水車 伊豫 稚子
やまをれゆき志剛まりや帰 全 花 杜あ
月とわくく多舌いおおもとあうと 列宿

を我んよ屋くふたりて替りき 五級
こか〜のふたち〜 や鳴乃海 打さ

歳竟
月記

こから〜や是う〜と終をこ〜すれ 金毛
何乃多かよ ちされ〜ツ〜 法齋
分別母れよともぬ宵の月出さぬ ち鈴
おそけ〜るやとさ〜よさ〜菊 柳水

猶乃志向り来るともあらずや 況足
年貢もたしくぬらうと雖も 惟然
きくその文を尺也るれ若くは 清齋
ついでに風市乃蓋も志くやき 念毛
くより教をきくうとてくし出る 梅子
何の苦をあらうにきかりと 雲鈴
明日の明日今宵の月よたの 惟然
元乃流くわふよう居て 清齋

あつて官より手寄つるに 念毛
志を合ふに 人の血つき 巴流
花さうりくあらうとていひく せり
つけさぬあるぬのあさか 梅子
うけらふの以格よとあつて 清齋
元もあつて年々く 況足
筆をていひ 梅子 惟然
ふとあつて 念毛 念毛

月さまのさあめ事おねをひろの巴流
柳むお岸の岸とととふ 淡齋
ふりりとお後へも特にみあまなり 梅子
とととととふ不乃嫁入の沙汰をに
み草毛系馬おくとむけうー 沢足
とととととふついで沢亀百ぬっ 巴流
道々うあお酒をふいて来る 金毛
あつ油まううなぐりて苦うえ 惟然

あつ油まううなぐりて苦うえ 惟然
あつ油まううなぐりて苦うえ 惟然
あつ油まううなぐりて苦うえ 惟然
あつ油まううなぐりて苦うえ 惟然
あつ油まううなぐりて苦うえ 惟然
あつ油まううなぐりて苦うえ 惟然
あつ油まううなぐりて苦うえ 惟然
あつ油まううなぐりて苦うえ 惟然
あつ油まううなぐりて苦うえ 惟然
あつ油まううなぐりて苦うえ 惟然

文小

茶のむら細みち絶く海らり伊絲應三
茶茶や人めもやうかき時日純子

各取琴よ
しらぶ

耳あわさるるもきし松の琴初三
外通る 嘆も氷るや夜乃琴更互
冬竹よ 風ももれぬ夜の琴 純子

なふりし危きおのしと柳の木はり
たらの木より花よりし七十
余れを秋をいとる中よ葉こ
とふらぬくあり出れをそき

此方(せき)けしそまのやうい
しとけしとあんむう物うり
まこへるその取

柳乃梢ま川本町の味をさけ 淡舟
木々の葉あみさけしけしをさば七六乃女
静さやあは冬あれく京のねん 毛角
かこくハ教のてつふしこれバ 大茶

懐旧

むら 芭蕉のあゝ美哉 写し一本
く 世ふらひくさるゝの気をと
あゝいこ七文井海

ちる志やまきそ 芭蕉 洞

こころ 氷仙乃 芭蕉 洞

ほのくと 掃除目のねとつ 芭蕉 洞

とやまきこ 芭蕉 洞

いよ 此お山乃 芭蕉 洞
芭蕉をふらひくさるゝの気をと

芭蕉の
自注の
句毎のま味各こふや 唯是 天乳
人よ心をけ 萬竅怒號響響
屋いふ吹く且人をと泣く
つらき 芭蕉 洞

作者
芭蕉
破
風

い川乃 芭蕉 洞
何ふそらの止まる 芭蕉 洞
あゝぬり 芭蕉 洞
折く 芭蕉 洞
は 芭蕉 洞

のちうけに思ひを流してそれ再
とをゆるぎも終りきまひぬ誠目
くま跡になれぬとせあか
むとら記るにおもひ言はるり
か又芭蕉の暮を破るこれと
も終り古人と成るるをいぬ

う河松る 人あも塚乃芭蕉うん

更五州

されそのなほななりこのう
更互れもやうみ乃うんまめこれ
らなほこころ事のれいさ
みもつさなせめくもあ人余波
なれとるをさるるも里ある彼
ま風をさむ付まも風やまか
あるあ海の波乃をふのこ只その合
細をまめをとぬた身をとおとら
せりまあ何事とせみぬや花より
せ月になぬよあちの小舟のたまを
くもさうかあうねらうのたまを
たてて今い古人とありまひし
臍の悔いふうまこあはれこの三
とをうり今にけひ京師ま旅の
んを体の正志もいぬの位くまひ
栗津の菴も月と近くいぬの

人々を奉回ひり井梅より
周りとおひあをそとに給く

かひもたつとあもいふけう

淡齋稿

丁丑の冬

是の雅然子より書みより尺書
斗くこもとむらじのそとに

あはれあ々のきとらるる哉
今後侍ま

昔あやいほく哉とてあはれあ
うれとあはれもあはれむもあはれ

あはれ

あはれ

あはれあやつとあはれあ人のあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあ

初會一折

惟然

我々宿ようとをひそに閉るゆりけ

去乃自むる雨ちりて流 流歌

まろくを糸糸拵へて身の供て 雨波

もろく昼さうれ山乃を何い 冬素

それ初との用い何々の月かえん 秋

もろくのぬき今も解りたる 然

秋の路みくくへあまを馬乃感 素

不使やとくへ身乃く進て行 改
 よんは母今却の目新の風をさう 然
 こころは枝へもさうさう松 枝
 後とくおんやけ乃鯛乃阿さう心 汶
 少さく終とん法白光る星 素
 不ろくおひひまいささくも弱う 秋
 えてめさぬう 上ふれ一門 然
 進くとん二日よつふ此離を 素

ふつ〜 霧乃飛、下りるれ 改
 花よりいりこまきつる月をさえ 然
 獨話よ 巖よりせんさうあり 無

文ふまぢ

学ふれや下をぬふふ 初きふ 孝後 聖五

吹の初を同^{東武}五士川^馬の春深し^沙 柳^明

誠毫

五文

朝日新々^さ白く^く香^香
やそ^そ待^待た^たぬ^ぬむ^むらん^{らん}の^の花

おまの哥とえよあまか

七文

雲ら^らく^く其^其竹^竹の^の心^心に^にう^うく^くひ^ひす^すの^の
一^一志^志の^の心^心を^をあ^あら^らん^んの^の心

一志の心も旅人の俳諧はおけるまむねをえ
るれな句付もともふまゝのこといひくそ昔
みよほのぬ事おえそ語ぬまゝのては深く
味ひぬ名文字の平仄をいも日記まゝの
る且又下回を和らげよの昔をいひく

そはくたにお目えたり大知の天下の知をとり
大任の重なるごとくは乃一擧たすはや何え
此小徳を以て志す一と己を以て事何んや
一又物語にある所の中さしおとこは首
さみくよた白なる一と志やまこころは
そつての志やあはれ一と向まらるるは
祿をとおひあまんとつとに多く一と

一風雅の言句の外み何んや又風雅のて

風雅の言句の外み何んや又風雅のて
こ句乃ちかたにこころを向りて
佛ふちちあんとつとに風雅
と我も今もせとを多くにせんとかん
みやまのいふと生涯の道乃ちまたいめん
どうお物なりとつとにあつたのあ
やん志のいふとつとにあつたのあ
附録にお目えたり大知の天下の知をとり

芭蕉翁

紅梅や見えぬ恋はくちかむすこれ

又花生ふ恋せしこと文有り
ことしけりてりきれ侍るまほ

此梅のむう梅乃亦り 全

は二句絶子の反古の
申より出され也

志何くふれくしの静や梅の花 惟然

むめ咲や何の梢をゆるり 淡齋

とふらういあへん世ふ春のむ 五文

文り

梅香や南よりめくさの境 伊豫 恋と

春を友と九千九百乃むとん水 及凡

晴るを仰ぎかけあはれ小鳥は 泣代

三月尽

ちりくふ春や牡丹の花乃く 支考

去年の暮あけんちりほの
千山我々もいふをいふ

千山

来り香やきぬ西をわけよ
 縁も足せん物乃あきなり
 夕とをれ中とを是に
 ふかしく人々追くぬ物
 どののいくなまを月よみ所
 廿二三日乃やいむら
 さんいふは種葉もいふの

先かの人きり乃人のあ
 よいちのやんて道を葉られ
 ういひそそにまらとあ
 いふはあかしく知ほとわらえ
 刈りきりしえけりまら
 夕のあけりあつてにきり
 年ああ席乃あつくとあ
 仕合に互ふあつてあ

ちやのうけみ月乃をやく
花こけうちとけしきえはなを
とふ巖とせきしをいふ
山 秋 然

上巻
月沢

こゝは菜のこ 胡精進乃始る

泥足

羽をうりまをゆくり 雪 大座
大に志こし 月 惟純
さ〜と春と 梅 大素
それありをうり 梅 大素
葉のまく〜 梅 大素
白いのうけみ 梅 大素
とふ〜 梅 大素
梅もそのこけ 梅 大素

小宿さうり小そ尾うそね
 まゝ雪よあよる世人の行かぬ
 いくあさねとあつ〜い暮
 上京て朝寝せう小を解とた
 らあ〜と文のぬるひ
 そくてしあさあさる秋の比
 手はも〜いこと名月し〜
 なるも親子のなぬや〜き〜
 足 虚 然 彼 糸 素 足

多々中乃綿の草外 糸
 何乃海のたあ良しやとて死て並 彼
 向ひて阿まこと橋を一町 鬼四
 うは〜と嘆〜う兼此尺取 然
 ぬうさ〜ん〜るや又藤人〜 子
 さる事とあらうに春い丸のたれ 糸
 あより自由も 馴 深あ〜る 虚
 このあさあ退屈〜る小ね〜 四

日とうつちふどこのね半り
 おうけこさしちんかよゆきふ
 尺やましく種乃麻のさし
 目の中はあつらふ心もちのる
 髪のをけをいひ種ます
 まをそれねむるをいすみの
 坊をりあつちまの秋
 月の八つとこかしく(まの麻さよ)

素 子 然 葉 汶 虎 子 四

麻 岡うりましくこらう啼れふ
 むじやうま情しくあはれやうま
 標乃やをつひけりん
 そのねくのあうまをいすもとうけ
 船のあう代立ちつじりあ
 有水は是を洗へもぬきこさよ
 つんとしたるも花のむしれ
 まの風さしとあう吹てあて

麻 葉 汶 虎 四 然 子 素

何れも 雀 派 也 汝

是かゝり 春 之 流 水 之 名 亦 有 け 聖

ほし 之 流 水 之 名 亦 有 け 筆

庚辰乃きけり 此れは ぬき ぬき
なすぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき
此れは ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき
つれぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき

先 乃 也 也 也 也 也 也 也 也

今 之 也 也 也 也 也 也 也 也
也 也 也 也 也 也 也 也
い 也 也 也 也 也 也 也 也

總 之 也 也 也 也 也 也 也 也

稲 荷 之 己 年 乃 也 也 也 也 也
也 也 也 也 也 也 也 也

なほ日乃梢けこつちをあげ

るれ杜^つ

るれ梅乃^つ

梅の花畑乃白ひをうちぬいて

るるこつ種ささくは天^つ

長他^つやんは^つる^つを^つ体^つ

は^つま^つる^つは^つ前^つある^つよ^つ

ささく日れ長他なつちをうら

途中の^つ

菜の花やとらつちを日れよの何^つ

本津乃^つみ^つこ^つ

志川^つある^つ水^つあ^つん^つく^つを^つれ^つ解^つ

むぬの^つ何^つより^つあ^つる^つ

ま^つま^つる^つ二^つ眼^つを^つあり

先^つ藤^つ乃^つの^つと^つう^つに^つて^つ目^つを^つ覚^つえ^つ

その^つあ^つら^つい^つて^つあ^つは^つら^つい^つて^つ曉^つふ^つ

出^つち^つる^つ藤^つ寺^つの^つあ^つら^つい^つて^つの^つ狂^つ志^つめ^つや^つ

さ^つま^つい^つて^つあ^つは^つら^つい^つて^つ乃^つは^つ七^つの^つほ^つめ

天^つ香^つ久^つ山^つ耳^つ山^つあ^つと^つあ^つる^つ

そ^つの^つあ^つら^つい^つて^つい^つく^つも^つあ^つら^つい^つて^つぬ^つ山^つ

あ^つら^つい^つて^つあ^つら^つい^つて^つあ^つら^つい^つて^つ久^つ七^つの^つ

こ^つの^つあ^つら^つい^つて^つも^つ風^つ狂^つの^つう^つの^つ風

よしせ赤さうふなりてあひは
のりたりくとしてせしむちやうて
洪山中にあるもあませしむちやうて
れあつりしむちやうて今こふおち
てま衣あせしむちやうてをせしむち
さうにせしむちやうてあうかの寺あつ
又あつたはり何みたくもなきや
莊殿のさせい目と何れおめ
さうて流きに流く山伝をいつ極
井といふはまかきせむちの布5と
よれめ

うとせしむちのさせいとやなり
長谷の寺はまかきせしむちを彼
岸の中あつと用括あつこふこせ

さう彼岸乃花子とせしむち堂より花
屋れくまの都の法ある寺あひむ
及廻廊あるふあつ紀坊舎あ
まここちあつたはり川聖堂を
見つこて能善の天神とあつた
京地を此れあふまに何れとよ
りこ編のさせい川伝くこふ山の
こは消くも流きこせしむちの
散多の中よ
松平といふふありとせしむち

鏡さの子こせしむち
くちも
たあふふうなうて
つねまを二巻ふ解るまけちと

花のく八日松の尾乃親友信
ておろしととせいのこゝろの申
たす神こそとふすくれこおまじく
まふ先よと直回ほ陸寺もわと
近きちといとと元のけいけり
侍ももおちくゆつまじく久
松屋の何しに風報はにもの
しに勢は能ふとすむと一に
今表乃七印とらつとめ侍よ
いめらういふあふの羽衣あ
彼ありとらり

さうかざん 神よそ神をたまたあ
二三あまをるをとふあまあ出
勢のうに記はたふしとくし
宿れあふしよとふあれはと

せんといといとるくむ時
九日ハ路より入る屋きよぬ
屋北何東あふこのころ其名
たれみく

あつちあしとをい花小うちあつち
無福寺のうろを廻る堂塔のうろひ
て大あふこふはふとあひひと
とせ及風はけあふせめくやま
まあ芝のうろ根乃あふととやせ
るのみひ物くふと古のちいつま
そかいるのといふととあひく刃せ
とたつたおましませとあふ池あふ
さこれ猿乃浪風勢よまを自
るて神社のうろあふおむ社
かりくしとさしとあふはる感慨

さういふせまる所は物の音をむ
そふなるてあまの山の本麻子出つ
二月堂より大仏をおもむ造るもま
まなまを志とらなる神をふの
うまうちひひらりこよかこよと
ふのころとほるに白のふけありと人
くふいそりてく本津の川み出山キ
ふかりくみちく足さ体めり午の
下りより川風をけりくむり
それと能くあふとあうつさてもい
まの奥にたなるるま敷や一
みふくまよそひちととくり
中くちまむんをけりみふのむら
いこむを金まるとかちりきこい
る方も何しねまのそとをまめ
て乃てかちひつけり事ぬを

書付傳

まのめく

何を何とと志しん唯まの山
大佛乃身やちんかん一海り

かましくも風まなるる

古翁乃いま持人ん

まの雀乃

風乃中み啼りや雀此泣る宗

淀乃大橋まはく比いやうく

やうも晴りぬ

まのそふとち散の何とれ長宗六

淡齋同稿

七上

女道なきをくたはけくも後
人ようかひはつきいとをくやう
とやさゆてせむとて丁丑のま
あゝん大和杉節のおうり
書せしとて丸出されを字丸ぬ

七
七

別惟焚

大州

孤雲自在向風前
行亦非行還匪還
若了無心一場舞
來憑頑石打高眠

予為人大和のまふねをむれ
付とてしやうとていしとて
とてれし一二の楷やえ
尺送りし

法を立も是よりすふ花の朽く 巴流

芳野の花は杖さくみく
うなれえたふらの方なり
色付る彼鬼四の匂なり

くつり二月も花乃生あつり

梅う枝はやちりくとこよしの
て志てくく阿基を田家又膝を
容るる此お藝を求る手てお
松葉の味しう瘦骨城うり
世外此閑をおりて

七

今とてい志して 秋葉北 冷貫く

在る寺に宿つて業平の孤影を
向む草花細らちといふ硯を伝
ま古代の風俗より三階を男寺
をけて疎然こたは日くれり
上布ふとあるも安ありなれとゆ
それこそぬぐの川ふくこころ
行口乃花に散るこつたぬは不
ひよちりぬれれちるむさいりふ
まい進も記と奥阿るけき
めく白ふ半ふ字記するあを山
かくこけ入も四位の信る法とて
幽静の谷阿りとをまのまりと
おそくもまわりのけちるま
を此石より眠れも空をうて

万事を体はし

々々々いふ今日此花はあつてこゝを旅す

翁のらく二つ此

ついで母物さう何と

陽をちん我ら肩に立向紙子比

うらまて寐む葉山よけ神やねま乃我

いりて終極の比

あゝんいとあそ終あり

繩といはんらくさうれ楠やと 淡京
竹よそのよあなる事やお月ら月 五波
虎乃尾は犬魚ひらゝい花さうり 鬼系

文り

とうゆれ楳乃中や日ん乃春 聖紅

例の楳んふ
いささそれ比

としほくく楳乃赤をを波の水 五波

多敷人を楳り
伴ひて中伝

々々の後らひ出 若やとを舟 漱土

桃よ桃をうおひくゝい扇かとん 怪物

長采たるも月み誘引てま福さ
かゝるかひけ乃唐又体むま小こと
くらこれさう

小南いつまうり夜り 何とさそあ 汗無

柳の木に物く抱ん 一 把 團友

まき里の春や葉糖や 鶴うまみ 仏兄

春和
月次

五汶

今此色又涅槃乃阿摩の弟也
 菽あうくや雉子乃 唱立 合毛
 階あまの馬陽あふけうあく 浚糸
 けいよふ方うういあせう 統 梅子
 かまや又何風うくそく 瓜素
 月も今比山うあつちう 鬼系
 焚加減せんとう粟代を(あ) 惟然

一葉もくく 次の君へもく 坡三
 きてよをいもきぬ神乃わうりと 梅子
 さつたえその日此川村の後 面及
 親よるとめのと乃啼う何それ之 合毛
 くみく降もせ原あのおくろく 洪糸
 又遠へ志たれてまんと若あふん 坡三
 くのあともあをうりて記のあき 惟然
 大をさるんあおあれこく乃月 面及

京成出づ映も四つをけしん 合を
 花こつ詠いさ海人乃あをより 淡秋
 こ終り〜やせんやあもまき 梅子
 味の家阿まもれまこれ海まけお 将然
 阿もまきすこして 終るる道 夏波
 元よめとかう出會を何り夕戸か 坡三
 菜乃もれなるとさうらうらと 惟然
 叶も今どんと鐘も疎狭なるか 梅子

ちかけく〜ひもめうらつのみ 雨波
 梅もやうよめはあゆと告く海り 惟然
 さうめをあも〜もめ成呼こむ 坡三
 此宿の小記もひとける月涼〜 雨波
 葉ほさ〜く〜さ〜くお〜もなぬ 梅子
 海もうねりお出家とた〜これと 惟然
 み〜さうかかろうとらふ志てみま 坡三
 そろ鞠と終てハ酒も〜らやう 夏波

朽つてかたえまんご日よき乃 特然
 人集の口辨口乃 血はまきし 梅子
 阿まきり泣けれ夜りちまなけり 夏夜
 烟とまの御殿とを染けおほさかき 惟然
 うらむあふとつようあめを 城三

此言も中まあるり 阿まのあふ
 花の命あまはし くらんぬ
 よさかえ侍る母乃いふ侍るま
 ぬらんとうきし花中あけのふ
 あまきりまきんるる

ちよふあふとつようあめを 城三

あ

うらむあふとつようあめを 城三

別淡齋函丈

日く快はくぬれぬもの一うらなぬ
文更紙やうみれもあまかしくち
うらなぬとちえさきとて君に
のよせとてぬきまふをさきとて
よ後とてふれぬひとりのみ様
乃お枯れとてひりた

たのまふとちえさきとてお花乃乃陰を
郷乃乃春紙をそと

郷乃乃春紙をそと

鼻紙の何いり梅や何さく
おまかへつとてお花の咲つけ
梅子

とあれう物あくとあよ麦 鶴 巴流
昔中への記を忘やへも又花々 舎理
花より昔よ月よいりり 陣心も 太素

一 燕の何とよえよとたよ何りて
なる岩里とてや七の春紙を
はあるやわよ何くおもた云
をのみとて何きれ何る何る
ま何る何つとて馬尾まつて
の子里とのれむとめあしん
淡土東先生されとみさたれ
有るおとあつとての名おと
くはたの何とてきけん一向

上

のこり

四

まえよ〜何や〜のこり 銜月 柯言
 花乃又そ種をや川中 伝々 藤ん ^板 坡三
 墨筆 小まの成いし せよ 月と 总 嶺 士
 苗代乃 水や 系 故の 町 ところ 是
 花の 終 殿 山 吹 又 己 ま ね ぶ 花 合 毛

きくはし梅やオキリク折しとまき
とらんと西乃塩浜舟よそへいり
大やけするあしき海一終地ぬ
ゆもその淡き東先生のあまの
月夜より折あひ月さうれつき
まゝそのせのゆきを何と運乃必
折いよむらさち記りけりて考
年よとら此松師の訓席よか
とらとさちとせ松松のあま
にこそは日くの変及み記し先
師蕉翁の余凡をこつ小吹く
汝道ののまこと妙なる味ひま
何れあちなる事いと耳とせ
るれましくきくよ記句を求る
あつて原毎このよと成をを
とて感の志よとせまるとちん

志万葉の佳の風雅をこに源せ
里くふとまを代する記の上
み並くしう形何の南朝の幽多
不り心成と免むことさいい後
成の青雲をむひく業せよれ
付る物り物りさる坊のく
有へしやうりやるやあかの定
家公の秋よを能め捨るも
出れまし其里の夕夕と心り
といふいさしとれ亦逸するを
良遣法師のさひしさを宿を
立出るといふを分別より
甚感あるものなる今この誹の
や此坊を出るまやと何まか
あはれよよそのれあくあ
心回る記のゆいひききんこの

時考

名跡せんせん花みして海され

然師乃名跡又ひやる徳を
うけしん其全隣りて実法外
去つとめ静うあぬあつた
ししくあさよき乃あるとほく人の
さんをいしん其年再とめ其
志をあふ静くしあはれ世のちを
るふ静きとあのおおじんあとい
さかあるあを

庵めんと成あつた

夏夜

よいさそさるいん成かんる近よ
あうさああうらうて病えくれあ

之白

阿まてんよ阿持孫まかぬ花生盡 フシヒタ 可曉
後前直方
 研まのの瘦身とききた花乃旅 外川
 かうて又かんの阿くあそ 是 日也 十三ハ 芙蓉
 二音前よいましん 華の福き 智月
 湖乃底くや自ふ 花乃天 乙列

彼船よる乃便ゆえん

安んぎ乃玉清も洗といふ清ま船
 うまきくきのあせれあおあ
 山あとおめく神もまきあの中晴己
 せうんおおまかう 阿乃久小あまし
 かな茂のあうたあおひ出たなを
 玉乃くまも能道まふれまなまを
 てああまをたつ

是の心と昔も持のみま 此ま流 淡齋
 今日まあ乃日和を帯り 郭 全
 是うく是の西瓜の花の 之白

ふうふう夜をしのいでくれ

——くくくもそねよとま——さ
まて玉上府乃こまきくれ蘭の
よひさあひまひり

あまをみみあこころあさ——くくくくく

志とらなるあまもあみこけく
牛久保といふみゆりくもそねよ
回植あまこまとおのく並兵
まこころ中よも夏をま秋日
あこころあま

まへ四方れとやうもやえ何れ

ゆきとし入梅を十九日の夜もや
そねよも告のまけまきこねあ
くもま付付

世の中——なまを——とま——よれ——の

あま——くくく——ゆ片乃らん松

あまいも何ありん知りのあまを 桃先

とどる健かたる人のたあまあま
う——らほちも川をもうちこえ
あまあまも源寺の嵐来のあま
奥あまも岸の堂あまいさう福
ての雲をもうちまうひくすまゆ
ん乃——とさあは——く項をえりへ
まも——月のとがりまはるまどう
その仙人も幾とせ絶ぬんあまの
楯く——

よれこころ
あまのみ

何んらさるにたけまはえそすの月

五
たのしみ

らんく書おれき都乃中し
まのこれとけう終るはよ

紅く家々あつと赤れあ春なり決秋

風も茄子もり花のま〜〜 栞子

秋月乃知まらつとあつと赤くうて 惟然

秋のやうそとすめと 一吹き 太素

大くふ心やほくるも身にま〜 張子

晴ま〜〜と川のま〜〜 栞子

下畧

栞子

下

櫻 桐 乃葉や花と見えそ五月更互

志何うふれんこま
あそびひく

初より此卯の花はるまきかゝる 花子
散き大やと種う 煙え夕白也 桐葉
卯の花やまよへ 風標の浅ぬ日ん 若也
何のいしれまぶさ 夕顔の志白う 菊翁

さあ〜らみ葉を種いふ 花ひ合 音楽

世の〜そみお白の事なきにき 性然

と心もふ〜そと一筋をほとふれ 尼 智白

ま〜〜され〜らにふんそ骨おろろ 之白 辨は

この金の眠り

外ふ〜ん是とあく 花のそあふ 性然

朱雀のそよよ

風とらむうあつて

ま〜〜〜〜〜 此瓜は喰お白え 大素

暫くしてさ終せりうれとるぬら 阿字

細涼

そちが秋風やうとくく夏乃海意三

中

のこりまひ風いぢけとて海の音 淡舟
ふ寐まゝいとあひかて寐る此異さ 張子
艸乃ち秋をこれ異さとてか可 阿字
路乃よ路志うとてと善れはたふとも 淡舟

夏暑うと阿き小日物や阿う浮更互

仲き〜須戸ハ拾うかゝむく、全

五子東武(おとむくれ侍)のあまの
の俵うに有り阿う文解おけ建い夏小涼ぬ

又明日乃暑ささと知らん月よ月也あ

涼〜とや隣もあうてあなれ菴 艸

吾うとよけ小蓮乃うにあの種ハ 全

ひそかにあまのあはくうし今十三
回あはくうしあの余波はすれ
く〜く〜くあはくうし文解すもあ
うあはくうしあはくうし

いふお蓮の
うらみ

今更乃夏了蓮のそく記紫 淡素

記行の中よ

鴨の子やまらかしくれすゆと入 義多
涼しさのたそひまを団れ果よたそ 及凡

腰折ふよのちをこて

吹ふよ日ふか一日ほしくくれ 昔素

ちまたはこれる勢は深お小れこふ
さき方の根心記むまひくと

さそみぬ
おれ母や

軒青くぬく屋乃蔓乃花かゝ 純子

ひく山

系中くふうきよのわるお北お比 才磨

和とむれぬい道ふふまゝ 大兼中

時をるまおおく 乃中のまお 風玉

あかかゝまおをひくうほしくさ 心磨

忍ちおまを月を泳ぐまゝみろり 丹燈

まゝあゝ 定る時や 夏の色 光き

萩のわねを乃下のいふ若山に

うらな山とて月れおら萩山と

志れ不尾の烟長柄の櫛はまこい
の古烟ふきと物おとれ今宵
も神さひさつまなうけるいせ
やといふいふの
うらな

何せう名月あましとてなるは神の

變ともいふ可れ月乃まるるさか

縮つてくるまらるるともふさされ 大虚

外山といふた尾張のうらなうら

同とてなけきとてあぬはうらなる
を神ささるといふ可るさもたまひ
あういふさ記のうらなこらよわ
久ん既今道葉官いとて後く物
新しう多く此とてそのさか
まひめくさふ豆糠あんと神さ
ささめささるる

鳴らう今や帆つて此静ささ

けふささるに乃あうひなうとら

多浪さかの頂におさやうふ多
うつみ乃沖中をたひろくとさ
所まきささるる音さあの律
ようとささるるいふか丸の上
ま志ささるる此契アをさして

いんことし安川の風采は美なり
それ乃日こと小晴こころつと
え縁の辰なり〜豊豆受宮子
もはほしつ

これをも今却てひやく心ひやく

流すも五車花の糸はきよく
身成流あうのんなきと

清き心や秋あけとまらぬ

夫逆天則無道逆地則無德而外
走本居没落國故齋情天地乘想
風雲為從道之本為守神之要將
除万言之雜說而舉一心之定準
則配天命而尊神氣
と徳宣といふ記なき川を裁ま

谷のりあけ乃ちとまらぬをの
と蓋とんかす神をさる琴とも
せそ人のまき酒をさる〜も志
志らもし

巻ふふ〜詩ハあけぬらん松よ
鳥松屋

文よさこめ

新白や竹よとよふ家たかあき
徳三

飛ぶくさく鷹のこ終ふ日と 洪舩
 釣魚よ棧娘を志す所のいとう 一廊
 今も秋乃るものも 棧娘物言を 語志
 力を秋のうと おもひ風を只 時風秋
 こそ 浪葉いふふきに 入て 朧女いふ 乃風
 昔かつてそれなうい月乃るを 釣者
 秋の路乃仕るいふ 何事の夕白く 洪舩

七夕

されも妹もうと 入るよ 若草妻の衣 独子
 本日の秋十日何まるもの事れう 元女
 尾崎まきくま川りあ中ふ 麻を啼 劉賓
 釣魚いせよ 拾ふよに なる舟もさそ 怪胎
 下をいそし川かうはと 玉まのい 智月尼
 あまふに ねんあをい 女 鬼あかり 錦江
 船籠乃何さうち 魂のとよ 壱 乙刑

うねだる火乃 雲茂川
 節(五めく) 巳え

原と異なりあま終ふ館よこし館 柯高
何とわくも 終るも 嘆 木槿 金元
推の木の色もさむらや秋の空 去来
蝸牛 月やさぬさくせん 秋の風 かぜ 小枝

一打

何とさそはらこめて 終をみあへし 惟然
何とさかきく月乃さくせん

心をえていまの世をひやしくくく 大素
片にたのしみも 終ころれ食 然
中候又捨く 終るるをれ又成 了
さんさくく 雨ころるあき 素
心をたもてしきさつとを飛返り 然
川白たれそ 山をてしはく 了
是れを終らぬと 恨もあつけられ 素
何とくくくも 明日は菜大根 然

くる船を言はれ船手乃の国志と
 さ狭くそ月のまんと一五ん
 漸きうとかくそあふと流え
 くとけうけうか穉らうとひき
 とあてとさあのをうとそをま
 物喚りつと磯場と位
 舟ももる起るに船ふとふれ
 生互るまれまひと河をと
 素 了 然 素 了 然 素 了

記行乃申

法乃とるれ新麻もはさうらけけ
 山崎眺るはれ
 尾筋のちぬるまに何きそと寶寺 柯了

文よ

あは乃風初りかき〜ぬるふら〜 純子
夕の月内もとこまへ何〜んや 少年 三思
秋をかうこそ〜とおも〜も 昔素
青〜れ露よま〜と月の夕ふ 太純
夕の月只陽うかとおふよえ 四練
さ何月よ思〜ん事〜ふ酒のま〜 栞系
月とあんそ有〜んや〜一思〜り 故乃
夕の月ふと昔思を待やうれ 飛泉

47

五

物冷ふと〜るよあ〜るそ今日の月也あ

〜〜〜吃馬いさ〜あ月乃す後 素冠

今〜の夜のお月をれとも純子氏
撰身一月の依よん〜侍きたな
をさる〜り

〜〜〜ぬ

あ〜ん〜と茶を煮揚るや鶯の声 一牛
信〜家やう舞え〜と〜と毎の家 詠通

田家眺屋

ち〜菜ふ葱き〜し朝とれあ〜れ 体汁

六

夕月や庭を敷へき葉のうへと 張子
ちつきさる赤とんぼや秋のくれ恋こ

也水亭

うさばあそび葉もやうそまよ又 洪糸
としはかたさうととい葉のわあし 柯言
久あふ月入白なる 物ゆも 合毛
人の気も味畧ふれぬくまき葉 ^京水之
あれはく縮あつり 日あふひて 元流

よここと細目の月乃 四日子日 智月

塵芥そまふもまよふ ^{ナニ}是葉死 汎竹

とこまふ秋ふかろく ^{おお山}その上 凡仙

各名詩をのそく

あせつ 碓氷り 橙成 ^もふれく 困友

文

幸々進と梅よる風の宿亭さ 應三
 本枯や枝よりくほむむ 雀 互互
 本か〜やと居ふかきも 菜大根 中 活健
 空へ出る管がよ月の冬本立 沈糸
 十月のなふとあてとよその御合毛
 才了すえい本こも尺えさむ留也あ
 昔の日や川さく〜り又た〜りあや及風

梅葉の中陰をよみ

ちねもその何それ〜つ〜う〜く 沈糸
 ま〜

ふとんさ〜あ〜ほ〜おと忠ひ先 純子
 ちねち〜り〜れ〜る〜風乃甲純友もあう 梅葉

林字の家子もあ〜ん 梅葉の謂也
 あ〜ん 只平〜ののみ

ち〜〜〜んさあめもちねれれ〜り 徳三
 ちねち〜り〜竹もあま〜なれて時 純子

さぬくふも乃々朝くく音そ実 朝省
皆花の中は梅こそさけりや 昔素
風やいつきを 薩乃 早あらん 千柳
此まふ雲うたふふ 音あつた也
つね起くもねんるもかりあはむ 何月

光くさかり
むきあつて可なり

もね月の梢いそりし 吾れ乃月 念毛

月のそりの木枯るや
決み士乃れとよめとまれば

ゆりくるともいふれあふ乃々え 右座
お仙乃とふ淋いふこれある 夏夜
死ぬるのよさそく 音に死ぬるのよ え白
よ梅やさしく 音うりや ないき 寸松 仙尾
音夏夜うり 相と付あ乃 陰うか 白音 三利
音乃天音もふやあ ことま 乙列
冬う 音や何う 何紙去 出さる 芙蓉

白うして初とえなるは遠く此の
 花のをれいふは何とあけてまはれ
 一志やうと志まうて梅の今赤き
 純子

ねくまこ藤くまの藤さ
 淡舟
 とくへとう紅船ま乃と中
 小應こ
 ちやのきやん藤の何はけり
 桐葉
 こいしおふまの戸とぬる月
 今
 及風

黍乃なうととくのとく
 子
 おりしるんととく
 藤
 倉よらうんこ坂一ツ
 前
 三
 是のうらぬと物のおん
 藤
 藤く藤るやう
 小神ふつ
 風
 大さうふ汲んぞ水乃
 つい氷
 子
 泣く昔はとこ
 藤へてい
 へ
 子
 せまののもあふまて
 社昔あふぬ
 三

月まゝんぐるをまはれこふれこ
 汝秋をとやうこらゑふ入あ
 ちしよを拵る目出なそ好友
 花母さ何れをそやと能て物
 西原の春の物乃志まゝに
 わつくと拾焼くのとかなん
 ふまゝうせくそまを恨ん
 葉がれん何こり拾めておろせ

子 凡 紫 三 秋 子 凡 系

谷汲まそハ月をもつれとも
 麻の香れ衣ハあうそ留ちん
 のころ里んさ乃藤を別して
 糸くせくこのおれ糸の終そふ
 笑ひこけきと何こりあわそ
 只一夜こつこ一なうかふれそ
 蚊せうらあを居こかあそり
 漸とおろ何のこころひつき

子 三 秋 子 凡 紫 三 秋 子 凡 系

世

世

風 乃 子 妹 三 葉 風 草
 風乃子妹三葉風草
 風乃子妹三葉風草
 風乃子妹三葉風草
 風乃子妹三葉風草

淡 瓶 而 后 渭 川 泊 然
 淡瓶而后渭川泊然
 淡瓶而后渭川泊然
 淡瓶而后渭川泊然
 淡瓶而后渭川泊然

梅乃花こほろふ梅を逢ふは、階志
常と飛へるごとく梅乃りる故乃

紀勢の中ふ

舟入や東海乃りてみたり
そ水やあんなも花の咲やうか 隅然
花をふくし今花あり花よ人 飛泉
梅様おつゝふれけんよ 梅系
常々なんのあめさうさういこ 洪舟

と後くさめき海へあそび声 純子
舟のちり牛よ柳乃下りぬ 更互
鳥さへ鳥をさうふよる 柳 なつと 玄梅
草の花や雀とちよんく鳴まうり 洪舟

一歌

まよる乃梅よ余波を隔る
碎しそりるを山乃ころやさ 昔素
新者

いづれさきかきと雀まつて来て 決弁
さひまを月のかげ一たふ 隅臨
よも秋の是づれ以凡えま川音楽
おとろ 出しそそ ぐたおやう記也

天の川を此時やあるその秋のころ
はひしうもあす 程の御懐よりち
るふれぬをきすすこのををかん
るふん付く人は同中を好むぬれ
も思ふは物乃んもつくまらんぬれ
さねる べん 能のおもあ月のうち
されたもきも外く香もあはれえよ
アサヒとくぬれ せははれおの物
は初きころの花に決弁推士のあうめ
ありきよきいとみちおもあん
笑へてなるりとりか こ子園がま
このりきさんやおといこめるかよ可
お不可思儀の跡をたほりぬれ
らういし登の沖のめくみえと白雲
いふかかしくあり

飛香會禰宜祝千卷

とほきうう的あるをうたはた何の彼
一は飛香の海やをと思きこひ
て所こい

顔の便りこい

何のよと梅乃白ひよ何のうら子
いゝきもこゝつの花のあゝられそ

まごぞる人かはあのおつゝあるを
よありあひまの情のわけるるたれ
うは成これとせさうんすもや流
の流にまうたこゝんををたとも
まよまの上りみ下つ志もととを
こゝろの静え

何のうら子梅嫌ようとやあ音楽行

昔素子のうたは靈なる哉感ふそ
飛香と云は宜れ子と云

飛 香 会 夏 中
以 口 吐 旌 虹
一 揮 筆 取 子 卷
如 寐 寝 公
隅 然

梅くさりの日乃幾日こりや志とけあさ元女
 無ととををあふそそかまの梅仙少年
 とんととやめさか雉子花よかく立寄
 何多を柳てあけた静かなえ粧凡
 おもこの花またえちり生きてはよを志
 いつひもらおあふと思むめ花ぬ夜

こ終つ〜九りまゐる頃何り千山山
 よしんせせ紙雲八坂の夕暮暮左虚
 ま〜蝶の羽乃こいしや風のせら二コヒタ約雲
 何〜かき猫とさん〜ふりまはれ紙竹
 むくつ〜髪やゆあうちもいらの白白家川
 とあふれい〜あつちの梅乃花轡真齋

つしとあいなさき梅乃山の中へと
 枝の枝のあひをきては香むあけ
 うつらひけさぬ向のまこふまの風流
 あんと〜い〜さふりあふのわさ

どのふらふらと
 いさうぢやふらふらや何れぞの
 あつたはれぬ何れぞの
 うめははれぬ何れぞの
 かたはれぬ何れぞの
 おのつらうやまをさとしつてかの大
 倉北一粒あるをさとしつてかの大
 中志城やせんせん平風あつたはれぬ
 あつたはれぬ何れぞの
 洪舟ヤス

一句をかまきりて外はむらひにむらふら
 ようと虚実おぼろしく或はむらひにむらふら
 凡性の全体をさしつて

どのふらふらと
 いさうぢやふらふらや何れぞの
 あつたはれぬ何れぞの
 うめははれぬ何れぞの
 かたはれぬ何れぞの
 おのつらうやまをさとしつてかの大
 倉北一粒あるをさとしつてかの大
 中志城やせんせん平風あつたはれぬ
 あつたはれぬ何れぞの
 洪舟ヤス

そらへてまゝに自然の妙もあつるなり
水流あまればこぼれし耳は初てを
おのみちうたはともせしめいふ
風美よよのこぼれし聲ひたり
儀きふ似てほくやまに似てか
そるる人なむおしそ借ふ
こゝろのみちをさす

里へ家へ志のつらさ

そよつらさ

あゝかき流りとうもあひけん 潜志

とらふよき東風のたも寐むさ 栞

せんたうとまゝゆたより掛月 洪

おくとたまきぬ川のまゝへ 志

流ころおろこもあまらぬ 葉

茶の香はさあ〜〜〜
一葉のうへり皆 同志を
うむはくも〜とま〜とあんとあ
きま〜牛のぬあう 啼〜こと
ぬきま〜衣ま〜さ〜り阿〜と
ぬ〜ともかく〜も 一紙叶〜も
あ〜とつ〜あ〜してあ〜乃ま〜の思〜
茶の香はさあ〜〜〜
純子

あ〜せ〜く〜日〜の〜何〜く〜と〜出〜る
く〜さ〜と〜終〜往〜来〜又〜家〜の〜と〜ぬ
こ〜ろ〜く〜真〜を〜な〜ま〜あ〜く〜ふ〜喰〜へ
一〜ふ〜は〜花〜も〜つ〜そ〜む〜を〜着〜か〜る
畑〜人〜並〜り〜お〜い〜く〜つ〜い〜り
こ〜の〜さ〜そ〜永〜く〜く〜
心〜と〜這〜出〜て〜湯〜漬〜〜て〜せん
志〜山〜あり〜と〜降〜も〜あ〜り〜も 又〜紙〜も
茶

まゝにいとそよるれとにづく

志

みよふ歩けと物乃時何くは

子

どうまろいこしむの君を

休

枕うまてこふも花乃多さまを

去

あうとまろく来りあるは

系

せむらふ糸小は居やき平清

計

風あゝそめぬ 決まおあま

子

飲りあふ糸色とるんでるぬちん

美

珍しくてもまゝんも何石ね

志

麻まへぬお別たれと年もくれ

子

あの中あんなたんの世の中

系

いつまゝあつてくまゝさく淋しい

志

そいあゝいゝまほまゝの身さ

系

仕合の花よんどく花もさるを

系

あまゝこゝろ二月の陣

筆

山さくさく出く枝の阿き以骨意三
一日のつれを花を籠る花 桐葉
余花を花をさくさくけよ山極也水
蛙らも幾日啼しる 所多え 船省

彼岸

新しの櫓よこ終り此花り 潜者

記行の中よ

さくさくして行やよふ春よの 櫓なる凡

みしりいりもも志のくも啼も雀 昔素

花の日記よとよふ

今に世に成りしともるよの 凡他

花の日記よとよふ

花よしてかたきまきしるそ阿さくき 外川
されもさ何まのぬらぬ茶う春 汎竹
そも春よ立ても居てもおのりるう 可曉

一日を記せよとよふ

世一
つるふくまをふくくと夕を雀張子

又小田久平乃其也

其宗亦於此也骨折半よあふ洪林

陸月の片も東山あこりよゆ
めきことわくた洛月もそ一日或風雅
乃室よ奉りたるふあかしくも
見々鳥落人のこもを淡齋
雨波書留めおられ其木くくも
いふをともよとあすもやれくも
凡早の塵を拂し居執の底を
あく中よも淡齋先生綿きく

故郷に帰らまを終る寂懐

——は梓よあなふ

去る世の人を願を解ん

おもふよりの奈

美濃

太虚堂

元禄辛巳秋

京寺町通二条六町井筒屋庄兵衛板

ふふ中島杏子氏を合下一冊

題簽は坤巻のふのみ存す。

題簽に黒地白文のて書けり。表紙は淡藍色

殿の言作のふを借ります



昭和丁酉年九月十日

Handwritten text in a cursive script, possibly a signature or a short note, located in the center of the left page.



